

アクティブ・ラーニングによる学生の「学び」に関する質的研究

—共栄大学における産学連携プロジェクトの事例を通して—

Qualitative Research on the Effects of Active Learning:
Case Study: Kyoei University Industrial-Academic Partnership Project

堀 井 希依子・内 田 学・宮 島 裕
Kieko HORII・Manabu UCHIDA・Yutaka MIYAJIMA

概要

本論文は、共栄大学国際経営学部におけるアクティブ・ラーニング「産学連携プロジェクト」における学生の学びの内容を明らかにしたものである。履修学生が提出したレポートの内容分析を行った結果、『経営学に関する実践的な理解』、『スキルの習得』、『チーム・ビルディングに関する学び』、『個人の課題と目標の設定』、『社会人になることへの気づき』、『職業の理解』が学びの内容として示された。本結果から、「産学連携プロジェクト」は経営学をより深く理解する機会を提供するとともに、キャリア教育の側面を持ち合わせていることが明らかとなった。今後は、学習した学びやスキルをさらに発展させるシステムを体系的に整えることが必要となるものと考えられた。

キーワード：アクティブ・ラーニング 産学連携プロジェクト 内容分析

Abstract

This paper defines what students learned through their participation in an active learning industrial-academic partnership carried out by the International Business Management Department at Kyoei University. An analysis of reports submitted by these students showed that they (1) gained a practical understanding of business management, (2) acquired skills, (3) learned about team building, (4) learned how to define individual problems and set targets, (5) realized what it meant to be part of the professional world, and (5) gained a better understanding of the profession itself. These results indicate that in addition to offering opportunities for students to gain a deeper understanding of business management, industrial-academic partnership projects also provide value in terms of career education. In the future, an organized system will be needed for further developing the lessons and skills learned during these projects.

Keywords: Active learning, industrial-academic partnership project, content analysis

目次

1. 問題と目的
2. 共栄大学における特別講義「産学連携プロジェクト」の概要
 - 2.1 到達目標
 - 2.2 履修学生
 - 2.3 授業スケジュール
3. 調査方法
4. 結果
 - 4.1 学びの内容：『経営学に関する実践的な理解』
 - 4.2 学びの内容：『スキルの習得』
 - 4.3 学びの内容：『チーム・ビルディングに関する学び』
 - 4.4 学びの内容：『個人の課題と目標の設定』
 - 4.5 学びの内容：『社会人になることへの気づき』
 - 4.6 学びの内容：『職業の理解』
5. 考察
 - 5.1 「産学連携プロジェクト」の意義
 - 5.2 「産学連携プロジェクト」の課題
 - 5.3 おわりに

1. 問題と目的

近年、学士課程教育は大きなパラダイムシフトを求められている。2008年度、中央教育審議会による答申「学士課程教育の構築に向けて」において、学士力の重要性が確認された（中央教育審議会，2008）。学士力とは、①知識・理解（専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解していること）、②汎用的技能（コミュニケーション・スキルや情報リテラシーなど知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能）、③態度・志向性（自己管理能力・チームワーク・リーダーシップ・倫理観・市民としての社会的責任・生涯学習力）、④統合的な学習経験と創造的思考力（自らが立てた新たな課題を解決する能力）を主な内容としており、学士課程教育における新たな方針として示された概念であった。

続く、2012年には「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」がまとめられ（中央教育審議会、

2012)、アクティブ・ラーニングをキーポイントにした大学教育の質的転換が強調された。文部科学省によると、アクティブ・ラーニングとは、「教員の一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法」と定義される。つまり、現在の学士課程教育では、従来の知識伝達型の授業を抜本的に改革し、学生の主体的な学びをアクティブ・ラーニングによって引き出すという“学び方”の変換を行うことで、社会で生き抜く力そのものを養った学生、すなわち学士力の高い学生の育成が求められているのである。

文部科学省が報告した「平成 25 年度大学における教育内容等の改革状況について」によると、対象となった国公私立大学 771 校のうち、「アクティブ・ラーニングを効果的にカリキュラムに組み込むための検討を行っている」と回答した大学は、平成 24 年度では 55% であったのに対し、平成 25 年度には 62% と増加傾向にある。また、間嶋ら (2016) は、アクティブ・ラーニングに関する研究は、その関心の高さから近年多数の蓄積があり、その中でも、いかにアクティブ・ラーニングを運用するのか、またいかに期待する学習効果を得るのかという方法を探求する実践的な研究が多くなされていると述べている。

共栄大学国際経営学部では、学士課程教育における質的な転換の社会的な要請に応えるとともに、建学の理念の一つを成す社会学力の育成を強化することを目的として 2009 年度より、プロジェクト型学習（以下、PBL：Project-based learning）の手法を用いた特別講義を展開してきた。PBL とは、アクティブ・ラーニングを実現する有効な手法であることが文部科学省により示されており、社会生活において起こりうるような問題や課題を疑似体験することで能動的な学習を引き出そうとする手法のことを指す。

本学では、アクティブ・ラーニングを展開するに際して、PBL の手法を用いて授業デザインを行ってきた。具体的には、2009 年度にプロスポーツチームとコラボレーションしたオリジナルグッズの企画・販売やイベントの企画・運営を行う特別講義（共栄スポーツ：共栄 Sports Business Atlas）を開始した。また、2010 年度には、学生が結婚式および現地ツアーの企画・運営を行う特別講義（共栄ワールドラン：共栄 World Learning Atlas）を立ち上げた。そして、2016 年度より「産学連携プロジェクト」という新たな特別講義を立ち上げ、より多くの学生がアクティブ・ラーニングをとおして学ぶとともに、学士力を育む機会を享受できる体制を整えた。

それでは、2016 年度に新規授業として開講した本学の特別講義「産学連携プロジェクト」は、学生にどのような学びをもたらしたのだろうか。学生は、何を学んだと認識しているのだろうか。先述のとおり、現在の大学は、まもなく社会へと一歩を踏み出そうとしている学生に対して、何ができるのかが問われている。積極的な取組みを展開し、そして真摯にその取組みの結果を振り返り、反省し、改善を繰り返すことによって、この問いに対する答えは形づくられていくのではないだろうか。そのためには、学生の視点に立って

授業を評価するという試みは不可欠である。本研究は、共栄大学国際経営学部の特別講義「産学連携プロジェクト」における学生の学びの内容を明らかにすることによって、本授業の意義および課題を検討するものである。

2. 共栄大学における特別講義「産学連携プロジェクト」の概要

「産学連携プロジェクト」は、共栄大学国際経営学部において「専門能力養成科目・応用科目」として開講された(選択2単位科目)。先述のとおり、本学におけるアクティブ・ラーニングは、PBLの手法を用いている。さらに、いずれのアクティブ・ラーニングの授業においても、現場主義をモットーとする本学と民間企業とが産学連携し、授業を展開するという特徴を有している。2016年度より開講した「産学連携プロジェクト」もその授業タイトルから理解できるようにPBLを用いたアクティブ・ラーニングを産学連携により実現できるように授業デザインを行った。具体的には、2016年度は、株式会社温泉道場(本社:埼玉県比企郡)と連携し、同企業が運営する温浴施設「おふろ café utatane」(所在地:埼玉県さいたま市)で開催される利用者向けのワークショップの企画提案・運営を本学の学生が実施するプログラムを授業内容とした。

2.1 到達目標

「産学連携プロジェクト」では、①経営学を応用的に理解・活用できるようになること、②(情報リテラシーも含めた)プレゼンテーション能力を高めること、③チーム活動の能力を高めること、④主体性を高めることを到達目標に設定した。到達目標の設定においては、2008年度の中央教育審議会における答申で示された学士力の内容に加えて、共栄大学の建学の理念および本学が力点を置いているプレゼンテーション能力の向上を考慮した。連携先企業から課せられたワークショップの企画と運営に関するプロジェクトの解決を遂行する中で、学生が最後まで諦めることなく主体的にその答えを探求し、上記の到達目標を達成することを期待した。

2.2 履修学生

履修学生については、本学の「経営学基礎A・B」(専門能力科目・基礎科目・1年次必修各2単位科目)をすでに履修している2年次生から4年次生を対象とした。「産学連携プロジェクト」では、アクティブ・ラーニングをとおして、先に示した到達目標の達成もしくは接近することに重きを置いた。そのため、本授業では担当教員の指導が適切に行き渡るように履修学生の数に制限を設けた(上限20名)。履修学生については、本学で新年度の授業開始前に学年ごとに行われるガイダンスにて授業内容を紹介し、その後、履

修希望者を面接により選考した。面接は、授業の担当教員が行い、志望動機やモチベーションの程度、学生が達成したいと考えている目標を把握した。加えて、希望者には授業への継続的な参加とフィールドワークをはじめ授業時間外の活動が相当時間に及ぶことを確認した。その結果、2016年度は17名の学生が履修した（男子学生14名、女子学生3名・2年次生6名、3年次生11名）。

2.3 授業スケジュール

2016年度の「産学連携プロジェクト」の授業は、週1コマ（90分）の授業として前期に開講した。学生のモチベーションを維持するため、授業は長期化させることなく前期中に完了するようにスケジュール設定をした。表1は、本授業における授業スケジュールを示している。

表1 「産学連携プロジェクト」授業スケジュール

回数	授業日	授業テーマ	授業内容
①	4月13日	オリエンテーション	授業概要・評価・授業進行に関する説明
②		経営学の基礎学習	HRM・マーケティング・会計に関する基礎学習
③	4月20日	ワークショップデザイン論	おふろ café でのワークショップ実績・ワークショップの組み立て方の講義
④	4月27日	ワークショップの企画・提案準備 (1)	ワーキンググループに分かれてワークショップの企画案の検討およびプレゼンテーションの準備 ※担当教員ごとにワーキンググループを設定
⑤	5月11日	ワークショップの企画・提案準備 (2)	
⑥	5月18日	ワークショップの企画・提案準備 (3)	
⑦	5月27日	ワークショップの企画・提案準備 (4)	
⑧	6月1日	ワークショップの企画・提案準備 (5)	
⑨	6月8日	ワークショップの企画・提案準備 (6)	各ワーキンググループによるプレゼンのリハーサルを実施
⑩	6月15日	ワークショップの提案プレゼンテーション	産学連携企業担当者に対する提案プレゼンの実施
⑪	6月22日	ワークショップの運営準備 (1)	ワーキンググループに分かれてワークショップ運営の準備 ※担当教員ごとにワーキンググループを設定
⑫	6月29日	ワークショップの運営準備 (2)	
⑬	7月6日	ワークショップの運営準備 (3)	
⑭	7月13日	ワークショップの運営準備 (4)	
⑮	7月20日	ワークショップの運営準備 (5)	
⑯	8月5日	ワークショップの運営	おふろ café においてワークショップを実施

本授業の初回の授業内容であるオリエンテーションにおいて、学生に対してより具体的な授業内容、授業スケジュールおよび到達目標を示した。次に、学生が経営学の復習を行う機会を設けた。具体的には、ヒト・モノ・カネの経営資源に関して、本授業でキーポイントとなる概念をピックアップして講義を行った（ヒト：チーム・ビルディング、モノ：マーケティング、カネ：予算管理）。さらに、連携先である株式会社温泉道場から講師を招き、「おふろ café utatane」のコンセプトやワークショップデザインについてを学ぶ授業を設定した。

第4回以降の授業では、「おふろ café utatane」で実施するワークショップ案の検討を始

めた。学生は、担当教員により指定された5名から6名で構成される3つのワーキンググループに分かれ、グループワークに取り組んだ。グループワークにおいては、同じ授業を履修する3つのワーキンググループ間に差が生じないように企画するワークショップに共通のテーマを設定した。2016年度のテーマは、「女性の心と身体を癒す」であり、学生は各グループで本テーマを実現するワークショップデザインに取り組んだ。また、本授業には主担当教員の他に2名の教員が担当しており、構成した3つのワーキンググループに1名の教員を配置することで指導体制を整えた。

履修学生は、6月中旬に設定した企画提案プレゼンテーションに向けて、ワークショップデザインおよびMicrosoft Office Power Pointを使用したプレゼンテーションの作成、リハーサルに取り組んだ。その際、担当教員間でプレゼンテーションの重点的な指導を行うことを確認した。それは、本学がプレゼンテーション能力の向上に力点を置いていることに加えて、授業の到達目標の一つとしてプレゼンテーション能力の向上を掲げたためである。企画提案プレゼンテーション当日は、「おふろ café utatane」を訪ね、株式会社温泉道場のスタッフ2名に対して約10分間のプレゼンテーションを行った。提案後、連携先から企画内容に対するフィードバックを受けるとともに、その場でグループワークも実施し、連携先のスタッフを交えて提案内容の修正や具体化を行った。

企画内容が完成した以降の授業では、再びグループワークにてワークショップを実施・運営するための準備に取り組んだ。ここでは、実施するワークショップに必要な物品の調達や、当日のオペレーションについて各ワーキンググループで検討した。そして、2016年8月上旬に「おふろ café utatane」において、株式会社温泉道場と共栄大学とが共同で実施したワークショップが開催された。当日は、各ワーキンググループが約30分のワークショップを行った。

本授業終了後、学生には「産学連携プロジェクトをとおして、学んだこと、成長したこと、身につけたこと」というテーマで2000字以上のレポートを課し、学びの整理と振り返りを行った。

3. 調査方法

本研究は、「産学連携プロジェクト」における学生の学びの内容を明らかにすることを目的として、授業終了後に「産学連携をとおして学んだこと、成長したこと、身につけたこと」というテーマで学生が提出したレポートの内容分析を行った。レポートの記述に基づいて分析作業を行い、本授業をとおして、学生が学んだと認識している内容、成長したと認識している内容、身につけたと認識している内容に関する表現を95個抽出した。抽出されたデータは、KJ法を援用して類似性に基づいて分類した。分析に際しては、本研究

の2名の共同研究者とともに検証作業を行い、最終的なカテゴリとサブカテゴリを決定した。

4. 結果

共栄大学国際経営学部の特別講義「産学連携プロジェクト」における履修学生の学びの内容として、6カテゴリ、20サブカテゴリが抽出された(表2)。本学における学生の学びに関する分析結果をカテゴリごとに以下に述べる。尚、文中では、カテゴリを『 』、サブカテゴリを「 」で表記する。また、対象者である履修学生がレポート中に記載した内容については、“斜体”にて表記する。レポート内容の記述に際しては、意味が通じるものとするために前後の文脈と照らし合わせたうえで、必要に応じて筆者による加筆を行った。加筆箇所については、()にて表記する。

表2 「産学連携プロジェクト」における学びの内容

カテゴリ	サブカテゴリ
経営学に関する実践的な理解	経営学に関する実践的な理解
	モチベーション管理に関する実践的な理解
	マーケティングに関する実践的な理解
	会計に関する実践的な理解
スキルの習得	プレゼンテーションスキルの習得
	問題解決力の習得
	ファシリテーションスキルの習得
	情報収集力の向上
チームビルディングに関する学び	チームビルディングの難しさへの気づき
	チームビルディングの重要性への気づき
	チーム運営方法への気づき
	チームメンバーとしての気づき
	リーダーシップへの気づき
個人の課題と目標の設定	計画性の欠如の実感
	客観性の欠如の実感
	今後の目標の設定
社会人になることへの気づき	社会人として身に付けなければならない能力への気づき
	ビジネスマナーに関する学び
	社会の厳しさの実感
職業の理解	職業の理解

4.1 学びの内容：『経営学に関する実践的な理解』

「産学連携プロジェクト」の履修学生は、“経営学を学んでいるとはいえ、普段の講義だけではなかなか生活の中で実感するという事は難しいが、(産学連携プロジェクトを通して)生きた経営学を学ぶことができた”に見られるように『経営学に関する実践的な理解』が促されていた。経営学は、就業経験のない学生にとって身近な学問として捉えがた

く、座学による授業のみでは理解が進みにくい。そのような中で、履修学生は本授業をとおして、社会の中で経営学がどのように役立ち、どのように活用されるのかを理解していた。具体的に、履修学生が実践的に学ぶことができたとして認識している内容は、「モチベーション管理に関する実践的な理解」、「マーケティングに関する実践的な理解」、「会計に関する実践的な理解」であった。本授業では、共栄大学国際経営学部における必修科目である「経営学基礎 A・B」を既に履修している2年生以上を履修の対象にしたこと、および第2回目の授業にてヒト・モノ・カネに関する基礎知識の復習を行ったことから、座学で学習した内容を効果的に活用することができたものと考えられる。また、『経営学に関する実践的な理解』に対する上記のような気づきを得たことにより、経営学を学習することの重要性や意義に共感し、今後の授業参加や学習に反映させようとする感想も確認された。

4.2 学びの内容：『スキルの習得』

本カテゴリーでは、「プレゼンテーションスキルの習得」、「問題解決力の習得」、「ファシリテーションスキルの習得」、「情報収集力の向上」という各種のスキルを習得したと認識する内容で生成された。「産学連携プロジェクト」では、連携先企業に対する企画提案プレゼンテーションの機会を設定し、それに向けたプレゼンテーションの指導を強化して実施した。具体的には、Microsoft Office Power Point でスライドを作るうえでの留意点やノウハウ、プレゼンテーションの構成ならびに発表するうえでの態度など多岐に渡る。履修学生は、論理的なプレゼンテーションを行うための情報収集を行い、完成度の高いプレゼンテーションを作成するために幾度となく修正を重ねた。その結果として、『スキルの習得』というカテゴリーは生成されたものと考えられ、重点的なプレゼンテーションの指導効果が反映されたものと推察される。

4.3 学びの内容：『チーム・ビルディングに関する学び』

本カテゴリーは、チーム活動の成果として求められるチーム・ビルディングに関する内容で生成された。“場（チーム）の雰囲気のみならず、グループワークするのはとても難しいと実感した”とあるようにチーム活動そのものの難しさへの学びや（「チーム・ビルディングの難しさへの気づき」）、“人との協力関係の大切さが理解できた”に見られるようなチーム・ビルディングを実現することの重要性への気づきを得られた（「チーム・ビルディングの重要性への気づき」）。さらに、“先輩であれば、後輩が奥手にならずに、自分も意見を積極的に出しても問題がないと思わせる雰囲気作りが必要だと感じた”や“チームとしての方針や考えは、もっと全員で共有すべきことだと思った”というようにチーム活動を円滑に行うための具体的な方策も学びの内容として得られた（「チーム運営方法への気づき」）。

また、チーム内における学生自身の役割に基づく内容も抽出された。例えば、“(グループワークにおいて) メンバーとしての責任感を学べた” や“(グループワークにおいて) 自分の考えをしっかりと伝えることが大切だと学んだ” などの記述は、履修学生がチームメンバーの一員としての自分に注目し、どのように行動するべきなのか、どのような心構えを形成すべきなのかに関する学びの内容で生成された(「チームメンバーとしての気づき」)。また、“(リーダーとして) 人を動かす難しさを痛感した” や“自分のリーダーとしての未熟さを感じた” などの記述は、履修学生の中でワーキンググループのリーダーを務めた学生が、その役割から得た学びの内容である(「リーダーシップへの気づき」)。以上のように、学生は本授業を通して、リーダーシップおよびフォロワーシップに関する学びも認識していた。

4.4 学生の学び：『個人の課題と目標の設定』

本カテゴリーは、「産学連携プロジェクト」の活動を行う中で、履修学生が「計画性の欠如の実感」や「客観性の欠如の実感」をしたことから、今後改善すべき課題を認識したという内容で生成された。企画提案プレゼンテーションやワークショップの実施日など、予め指定された日程に対して、適切なスケジュール管理を行うことができず時間に追われた経験や(「計画性の欠如の実感」)、“広い視野で物事を考え見直していくことが重要であると学んだ” という記述にみられるように論理的な思考や客観性を持って課題に取り組むことができず見落としや手違いに気づいたという経験から得られた学びとして抽出された(「客観性の欠如の実感」)。

また、これらの課題の発見を契機として、“ターゲットとしている人に来てもらえるような提案ができるようになりたい” や“これから(自分に) 足りないところを補う工夫や努力を最後まで怠ってはいけない” などの記述が抽出された。つまり、履修学生は、本授業をとおして痛感した課題を改善すべく、今後の自己形成に向けた目標を設定したことが確認された。

4.5 学生の学び：『社会人になることへの気づき』

本カテゴリーでは、“(社会人になったら) 指示をただ待っているのではなく、自分に求められている役割を理解し、実行する能力が必要となる” や“社会人になった時に想定外のことも対応ができる用意をしておかなければならないことを学んだ” という「社会人として身につけなければならない能力への気づき」のサブカテゴリーが得られた。また、“領収書の受け取り方を知った” や“ビジネスメールの送り方を学ぶことができた” など、ビジネスマナーに関する知識も身についたという内容が得られた(「ビジネスマナーに関する学び」)。履修学生は、領収書を受け取るという経験がなく、大学の予算からの支出であ

るにもかかわらず自分自身の氏名で領収書を受け取るという過ちから領収書の役割や受け取り方を理解していた。また、本授業では学生が連携先のスタッフに問い合わせをメールで行う機会があった。その際にメールの書き出しや文体、メールを送信する時間帯など、友人同士でのメールの送受信では気に掛けないマナーを意識し、ビジネスメールの作成方法を学んでいた。これらの経験が社会人として求められる能力やビジネスマナーの理解に繋がっていた。

さらに、本カテゴリーでは、“自分たちの想定が甘く、ずれたものであったことに気づいた”や“(自分たちが提案する内容は、そこまで修正されないだろうと考えていたが)自分たちにとってワークショップが良いものに見えていたが、内容を知らないお客様からすれば面白みがないものだったことを理解した”などに表現された「社会の厳しさの実感」というサブカテゴリーも抽出された。本授業では、連携先である株式会社温泉道場のスタッフに対してワークショップの企画提案プレゼンテーションを行った。その際に、フィードバックとして示された内容は学生の提案を全面的に肯定し、受容するものではなく、配慮や検討が不足している点の指摘を多く含んでいた。この経験から、学生はたとえ自分たちが会心の出来栄えと自負したとしても、社会やビジネスの現場で同じような評価が得られるとは限らないという厳しさを認識していた。

4.6 学生の学び：『職業の理解』

本カテゴリーは、“知識だけでなく、実際に経験しないとわからない仕事をするという感じを知ることができた”や“リラクゼーションを目的とした温浴施設での仕事がどのようなことをしているのかが分かった”など、仕事をするということがどのようなことなのかや、連携先の企業もしくはその企業が属する業界での仕事内容を理解したという内容で生成されたカテゴリーである。産学連携をとおして、実際の仕事現場を肌で感じ、連携先のスタッフと共同作業を行うなど、疑似的に仕事の一部を経験したことで生じた学びのカテゴリーとして生成された。

5. 考察

共栄大学国際経営学部における特別講義「産学連携プロジェクト」をとおして、履修学生は6つのカテゴリーに分類される学びを得ていたことが明らかとなった。以下に、履修学生の学びをとおして考えられる本授業の意義と課題について述べる。

5.1 「産学連携プロジェクト」の意義

本研究の結果、本学における特別講義「産学連携プロジェクト」で、学生は『経営学に

関する実践的な理解』を深めていた。講義形式の授業やゼミナールの活動をとおして身につけた知識が、産学連携を伴うアクティブ・ラーニングによって実践的に、かつ深い理解を伴って身につけることができたと認識していた。加えて、本授業をとおして経営学を実践的に理解するとともに、経営学を学習することの意義も理解しており、今後の授業への参加意欲の向上や学生の興味・関心の形成において貢献したものと考えられる。

また、本授業をとおして、プレゼンテーションや情報収集力などのスキルが身についたという結果が得られた。さらに、チーム活動を行う場面においても、チーム・ビルディングに繋がる気づきや、リーダーシップやフォロワーシップなどチームの中での役割に関する気づきも得ていた。これらの能力や気づきは、本授業のみならず、今後の大学生活および社会に出てからも汎用できるものである。将来的にも活用できるスキルや気づきを習得できたという点は、本授業の意義として評価できるだろう。

学生は本授業をとおして、自分自身の弱点や修正点に関する課題を認識していた。さらに、今後の大学生活の中で留意しなければならない課題や改善しなければならない弱みを認識することで、新たな目標の設定にも繋げていた。自分自身を省み、至らぬ点を発見するという客観的な自己評価は、主体的な自己形成に繋がるものと考えられる。また、履修学生は本授業を遂行する中で、『社会人になることへの気づき』を得ていた。社会人になった際に求められる能力やマナーをはじめ、社会の厳しさも垣間見ることができたと認識していた。本授業は、ビジネスを疑似体験しているに過ぎないことに加え、教員によるフォローが行われていたため、リアルな社会の厳しさを学生が一身に享受したわけではないが、社会に出るとは如何なることかという心構えの形成の一助になったものと考えられる。また、履修学生は『職業の理解』も深めていた。未知の職業と出会い、その職業を直に肌で感じることをとおして、興味を抱き、自分の適性を感じていた。これらのことから、本授業はキャリア教育の側面も有しているものと考えられる。それは、単に経営学に関する実践的な理解を深めたり、スキルを習得したりするというハード面のキャリア教育を実現しただけでなく、就業観や職業観の育成というソフト面のキャリア教育にも結びついていた。特に、本授業は産学連携というスタイルで実施した授業である。産学連携によって、実社会との接点を積極的に設けることで履修学生は社会で求められる力を身につけるだけでなく、自身のキャリア形成のきっかけともしていた。これは、アクティブ・ラーニングと産学連携を掛け合わせたことによる重要な成果であり、今後積極的に導入する意義を示すものだと評価できる。

以上をまとめると、本授業の履修学生は、専攻する経営学分野における基本的な理解をさらに発展させるとともに、チーム活動における態度やリーダーシップ、フォロワーシップ、さらにプレゼンテーション能力といった汎用的なスキルを向上させている。そして、社会人に求められる能力や厳しさも理解し、社会に出る心構えの形成も行っていた。これ

らの内容は、2008年における中央教育審議会にて示された学士力に該当するものと考えられ、本授業は、学士力育成を推進するものであると評価することができるだろう。

5.2 「産学連携プロジェクト」の課題

2016年度に開講した共栄大学国際経営学部の特別講義「産学連携プロジェクト」とおして、履修学生は多くの学びを手にしていった。その中で、主にプレゼンテーションやチーム活動に関する学びやスキルを習得したという内容が抽出された。これらの学びやスキルは、継続的に経験を重ねることで、さらなるスキルアップが期待できるものであることに加え、社会的なニーズや汎用性が高いものである。溝上(2007)は、アクティブ・ラーニングを導入した授業を一つの授業の取組みとしてカリキュラムに組み入れるのではなく、他の科目との連関や連携を図ることが必要であると述べている。先述のとおり、履修学生が認識した学びやスキルは、連続した学習によりその能力の向上が期待できるものである。この特徴を踏まえると、学生が本授業で身につけたスキルを本授業終了後も発揮できる授業や機会をカリキュラム上に創出し、継続的なフォローアップを実現する学生育成システムの構築が求められるだろう。

さらに、本授業はキャリア教育の側面を有しており、学生は本授業から自身のキャリアに関係する学びを得ていた。しかも、その学びの中には、職業観や就業観の形成に関する内容が含まれていた。中央教育審議会は、2011年に示した「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の答申の中で、キャリア教育を進めていくうえで重視されているのは、勤労観・職業観の醸成であると指摘している。本授業をとおして、学生が得たキャリア上の気づきは、今後のキャリア形成における重要な役割を果たす可能性が考えられる。また、喜田・高木(2002)は、学生なりに進路について真剣に考えたいと思うものの、その糸口がつかめないために、就職に対する意識が現実的な準備行動へ結びつきにくいと述べている。本授業では、キャリア形成における小さな糸口を掴んだと考えられる履修学生が存在した。この糸口を自己責任として学生自身に託すのではなく、大学がフォローする体制を整えることで、有効で実践的なキャリア教育を実現できるのではないだろうか。本授業で連携した企業とのインターンシップ協定を実現したり、キャリアの知識や職業的な知識を兼ね備えた講師やカウンセラーによるキャリアカウンセリングを導入したりすることも効果的であろう。

5.3 おわりに

共栄大学国際経営学部における「産学連携プロジェクト」は、経営学の理解を深めること、プレゼンテーション能力やチーム活動の能力を高めることを目指すことで学士力の高い学生の育成を意図した授業であった。それを実現するために、アクティブ・ラーニング

を効果的に導くことのできる PBL の手法を用いて、ビジネスを疑似体験するという方法を選択した。しかし、本研究における学生の学びの内容分析の結果、当初、筆者たちが思い描いていた学びだけでなく、学生のキャリアにも影響を及ぼす職業的な意義をもつ授業であることが明らかになった。今後は、この授業の特徴を把握したうえで、先に述べた課題を解決し、いかなるプログラムを学生に提供し、かつそれをいかにフォローアップするのかを追求することが求められる。この不断の努力を重ねた先に学士力の高い学生は具現化されるだろう。

尚、本研究は 2016 年度における履修学生のレポートを横断的に分析した結果である。本授業の学びの内容をより精査するためには、本授業の真の学習効果を測定する必要がある。本授業を履修した後の学生の学びに対する態度や行動、チーム活動、キャリア形成に向けた行動がいかに変化したのかを縦断的に明らかにすることが本研究の今後の課題である。

引用・参考文献

- 中央教育審議会 2008 「学士課程教育の構築に向けて（答申）」<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf>（アクセス日：2016 年 11 月 2 日）
- 中央教育審議会 2011 「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf>（アクセス日：2016 年 11 月 2 日）
- 中央教育審議会 2012 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」<http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf>（アクセス日：2016 年 11 月 2 日）
- 喜田裕子・高木茂子 2002 「大学生の進路（キャリア）をめぐる心理教育的支援に関する基礎的研究」『人文社会学部紀要』No.2, 39-48
- 間嶋崇・橋田洋一郎・植竹朋丈 2016 「経営学教育へのアクティブ・ラーニング手法の導入」『専修大学情報科学大学研究所所報』No.87, 17-24
- 溝上慎一 2007 「アクティブ・ラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』第 7 号, 269-287
- 文部科学省 2015 「平成 25 年度大学における教育内容等の改革状況について」<http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2016/05/12/1361916_1.pdf>（アクセス日：2016 年 11 月 2 日）

